
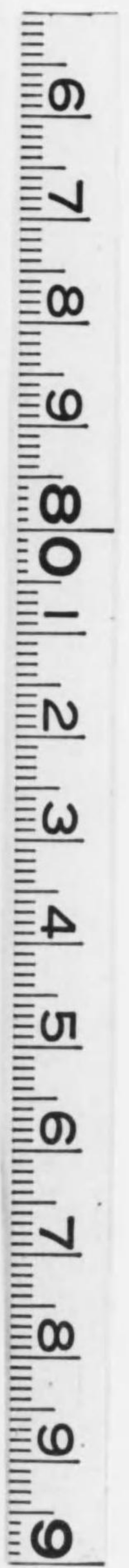


911.56  
V22

911.56-Y32-37  
  
1200500756941



始



911.56  
Y32  
3



萬物節



910  
249

目次

1

騷擾 一五

雪のリタニイ 一六

くちをどち…… 一七

首を吊るなら此の木でだ 一八

陸稻島を…… 一九

自分はこれまで…… 二〇

喫茶の詩 二三  
 くちぶえ 二五  
 こどもの詩 二六  
 ちらほらと…… 二八  
 はげしく雨が…… 二九  
 ある農夫に就て 三〇  
 うす濁つたけむり…… 三二  
 ぜいたくの…… 三三  
 遠望 三四  
 萬人を…… 三五  
 りんごよ…… 三六  
 どこかに自分を…… 三七

あんまり幽かな…… 三八  
 海はひえびえと…… 三九  
 憎悪のなかにも…… 四〇  
 雨ではない…… 四一  
 とほく…… 四二  
 それは誰のものでもない…… 四三  
 遠天の…… 四三  
 風景 四四  
 丘の上では…… 四五  
 あの鹽舟を…… 四七  
 冬 四八

2

友よ…… 五三  
 或る日曜日の詩 五一  
 いのちのみちを…… 五六  
 眼でみたのでは…… 六二  
 わたしの涅槃に就て 六三  
 秋ぐちは…… 六四  
 なぎさで網を引いてゐる 六五  
 ふうりう…… 六六  
 冬の着物 六八  
 身自らにおくるの詩 七〇

3

わたしは祈る 七四  
 雪 七四  
 なにもかもこれからだ 七五  
 先驅者 七六  
 パン 七七  
 山の麓をゆく汽車 七八  
 掟 八〇  
 帽子をとれ 八一  
 何もかも眞實である 八二  
 悲壯な風景 八三

蛙の詩 八五

4

自分の詩 八八

いのちのあるもの 九〇

ある日の詩 九二

黎明の詩 九四

夕の詩 九五

椿 九七

窓にて 九七

春 九九

萬物節 一〇一

太陽の詩 一〇二

蜀黍畑がある 一〇五

策には米が一ばいある 一〇七

日光の詩 一〇九

朝 一一〇

この鴉を見る 一一一

太光明願榮 一一三

雄渾なる山巔 一一八

日本 一二六

陸橋の上にて 一二三

日あたりに…… 一二四

一枚の櫛 一二五



雑草 一四六

冬 一四七

蚊 一四八

青い天 一四九

風景 一五〇

大風の詩 一五三

眞言 一五三

芽 一五四

かなしさに 一五五

題 箋 室生犀星

編纂後記 百田宗治

1

— 未發表と思はれるもの



電線、憐憫なく  
さみしさの交叉で  
ふり堆積る光  
さらさら鳴る黍の葉

### 騒擾

大旋風に捲きあげられた  
木の葉つばと塵埃と  
あやふく屋根の大鴉も——と  
この大都會の大空はどうだ  
何もかも捲きあげろ  
畠の野菜も家事も  
街上の荷馬車も馬も私も  
まつびるまの幻想と一しよに……

雪のリタニイ

ちらちらと春の雪

雪の上でラツバを吹奏する

ああい

ちらちらと

ふるそばから消えてなくなる

朝の雪がいい

林檎のやうな頬つべたもいい

なんともいへぬ

くちをとぢ……

くちをとぢ

めをみはれ

ぜんしん

ちからのこぶ

はるのあさ

あめあがり

しつとりとぬれたみちを

はだしで

しつかり

しつかり

ふみしめて  
あるけ  
づよきにんげん

### 首を吊るなら此の木でだ

わたしのすきな巴旦杏の木  
私はその下かげにしばらく立つてしみじみかんがへてゐる  
ああ巴旦杏の木はわたしを痙攣<sup>ひきつ</sup>ける  
首を吊るなら此の木でだ  
いまこそ花のさかりもすぎたが  
寡婦<sup>かむめ</sup>のやうなその花はなほもわたしを誘惑する  
足もとのカメラリヤの吸ひ殻

それがさみしくけぶつてゐる  
ああどうしてこんなに此の木はわたしをなくさめるか

### 陸稻畠を……

陸稻畠<sup>おかば</sup>をはしる電線  
電線はほそくながながと  
はてもなく  
その下のひろびろとした山腹の開墾地  
陸稻は金色にうれて重厚しい穂首をたれた  
秋の入日のこのしづかさ  
二すぢ三すぢほそほそと走り  
ほそほそと刹那刹那に

電線は世界のはての大戦亂を感じてゐるのか  
その電線の上にとまつた  
ひがん蜻蛉の列のしづかさ

自分はこれまで……

自分はこれまで

考へてみると

自分のすかないものを避け

自分のすかないものには澁面を見せ

自分のすきなことばかりしようとして來た

讀む本

交はる友達

たべもの

風景

天氣

其他のすべてに

それでよかつたか

これでよいか

これでどうして人間が大きくなれよう

此の弱虫め

強くなれ

おお恥かしい自分

それでも人間のつもりか

汝はこれから

人間の苦しい道をたどり

人間のすててしまつた仕事を撰み  
汝のすかないどんなことでも  
それが汝を殺しに来るものでも  
キリストがあゝの叛逆者ユダに對してしたやうに  
熱い接吻をもつて  
どんなものでもすぐやうになれ  
それが汝を生かすことだ

### 喫茶の詩

時計がないから  
時間はわからない  
午後三時頃か

そとでは雨がふつてゐる

寂しい雨だ

自分達はひさししぶりで炬燵の上にお茶をはこんだ  
そしていまのんでゐるところだ

野兎のやうな子どもはお菓子を頬張つたり

唱歌をうたつたり

でたらめの唱歌

室内はその聲で一ばいだ

妻は滴るやうな愛情から

いつしんに

乳房に吸ひついてゐるあかんぼと

目と目でみあひ

何か人間世界のではない言葉でものをゆつてゐる

わたしもそれにみとれてゐる

そとは水のやうな雨だ

窓の下では葉つばのない木が冷たさうに黒々とぬれてゐる

ばつたりと唱歌がやむと

子どもは何かぶつぶつゆふ

妻がそれを叱る

子どもは泣く

あかんほも一しよになつて泣き出す

わたしが一こゑ獅子のやうな聲で怒鳴ると

あたりがしいんとする

雨はさかんに降つてゐる

あんまりひつそりしてしまつたので

くすくす妻が笑ひだすと

それが雲切れの青空のやうに

睨みあつてゐた顔は溶けて

ふたたび雨の中までよろこびは溢れる

くちぶえ

ひさしぶりで風がなぎ

自分もめづらしく早起きした

あかんほをかかえて

そして朝の庭にでると

竹やぶではもううぐひすが鳴いてゐた

それをききつけて

それとなく子どもにかへり

自分も自分の口笛でそれにこたへた  
はるかに自分が上手である  
お手の上のあかんぼ  
う、う、うといひながら  
ばね仕掛のやうに跳ね返つた  
あかんぼもうれしいのか

### こどもの詩

みちばたであそんでゐた  
ひとりのこども  
どろを捏ねてゐた  
そのこども

そのどろで  
山をこしらへ  
そこに木を植ゑ  
家をたて  
馬をつくり  
そのつぎに人間をふたりこしらへ  
その人間に言葉をかけて  
ちちよ  
ははよ  
これでもうおしまひだから  
一ばん強く  
そして大きく  
こんどは自分を創ります

おおあのことども

ちらほらと……

ちらほらと櫻がさいた

寂しい街のひるすぎ

活動寫眞の樂隊がほこりを蹴立てて

ゆきすぎたそのあとに獨り

自分はしよんぼり考へてゐた

おおさくら

彼がゆすればその木の下で

自分はじつと跪座瞑目

自分がゆすれば彼は彼とて

はららちるさくらのはなをよろこんで

そこで鯨鋒立をした

おおさくら

ひがんざくら

はげしく雨が……

はげしく雨がふつてゐた

その雨にまぢつて

めづらしい雪が飛んでゐた

びつたり風のなぎたのをみて

からりと空ははれ

海のかなたへと



どんより大きな日は沈んだ  
常例のやうに  
おお、そしてこんやは  
かへるがたんぽでなきはじめた

### ある農夫に就て

なんとなく空は險悪で  
そしてくらく  
ぽつぽつ雨さへ落ちはじめた  
もう一日も終りであつた  
自分はおもひだす  
氷山のやうなあゝの山山を

鋼鐵<sup>はがね</sup>のやうな冬のあの日を  
そこではげしく  
たつたひとり  
たつたひとり  
大きな熊手<sup>くまのて</sup>鍬をふりあげふりあげて  
せつせと働いてゐたあゝの獸のやうな農夫を  
疾走してゐる汽車の  
その窓で  
自分はちらとそれをみかけた  
おお、きみよ  
どんなにそのころの自分がくるしんでゐたか  
君はしるまい  
自分が帽子をとつたことすら

君はなんにもしるまいが  
そのときから

自分の拳は石つころとなり

自分の頭には角が生えた

うす濁つたけむり……

うす濁つたけむりではあるが

一寸ちほそほそとあがつてゐる

たかくたかく

とほくの

とほくの

山かけから——

青天をめがけて——

けむりにも心があるのか

けふは、まあ

なんといふ静穩おだやかな日だらう

ぜいたくの……

ぜいたくのかぎりをつくしたものでないか

自分達のこの食卓は

青葱のいつもの

くさい味噌汁のほか、かうして

はるばる遠いハコダテのともだちから

おくられてきたはつかりの鈴蘭が  
まだいきいきと匂つてゐる  
何といふ朝餉だらう  
それだのに子ども達の  
ちつとも幸福さうでないのを  
さて、どうしたらよからふ

### 遠望

あれ、あれ  
お家うちがみえる  
障子が穴だらけだ  
妻よ

子ども達よ  
まあ、掌の上てのひらにのせて御覽  
あんな家だが  
そわこそおもちゃでも  
みるやうにみえるよ



### 萬人を……

萬人をひとりで病まう  
萬人をひとりで生きよう  
人間世界は  
まだみかぎつたものではない  
こんなすばらしい意志が

どこかに

草むらの蟋蟀クリキリサのやうに

かくれてゐる

りんごよ……

りんごよ

りんごよ

りんごよ

だが、ほんたうのことは

なんといつてもたつた一つだ

一生は一つのねがひだ

一生の一つのねがひだ

ころりと

こつそりわたしに

ころげてみせてくれたらもう

りんごよ

どこかに自分を……

どこかに自分を

凝視みつめしてゐる目がある

たつた一つの

その星のやうな目

その星のやうな目

あんまり幽かな……

あんまり幽かな

真晝だから

子ども達にはすかれないのだ

どこまでもどこまでも

ぶらついてゆき

そして霧のやうに

掻き消えてしまひたい

松の細逕である

海はひえびえと……

海はひえびえと

鷗や千鳥をひきつれて

すつかり遠く

ひきしりぞいてしまつた

冬近く

冬近く

つつましい生活くらしのやうに

けれどすこしあつぽく

そこで小さく

きらきらと光つてゐる

憎悪のなかにも……

憎悪のなかにも愛がある

その愛をたふとめ

あるとき

着物についた草の實が

しみじみと自分に

この一つのことを気づかせた

雨ではない……

雨ではない

雨ではない

すごいほど深い蒼空である

松の葉のためいきよ

とほく……

とほく

とほく

曲りくねつてながれてゐる

純らかな一すぢの水よ

自分をとらへた

大自然のすがたよ

それは誰のものでもない……

それは誰のものでもない

それは萬人のものだ

それをあふぎみるもののだ

おお、人間のくるしみを飾るもの

星、星、星……

遠天の……

遠天の

小さな月に

ぬれてゐるもの

ぼたんよ

寒竹よ

生死いせしにのたふとさにあれ

汝、山村暮鳥よ

風景

ゆふがたの  
るどのまはりには  
あちらからも  
こちらからも  
ながやのおかみさんたちがあつまる  
にぎやかなおしゃべりがはじまる  
ときどきは  
けんくわもできる  
そのころになると

そらでも  
ほしがきまつて  
びかびかひかりだす

丘の上では……

丘の上では  
百姓のおかみさんたちが  
どんなにかまつてゐるだらう  
風よ、いそぎな……  
大きな箕や箒も  
こんなときでもなければ



あたまよりたかくさしあげられるやうなことはあるまい  
何にせよ

すばらしい天気だ

ばらばら、ばらばら

百姓のおかみさんたちははやく  
粃殻をたてたがつつてゐるんだ

ばらばら、ばらばら

あの穀粒の音ときたら

まるで星でもふるやうじゃないか

あれをきくと

どんな貧乏をしてゐるものでも  
にこにこしずにはゐられなくなる

あの鹽舟を……

あの鹽舟をごらんなさい

まるで達摩がうごきだしたやうではありませんか  
だがおわらひになつてはいけません

あれにのつてゐるのは

海草や貝類のおかけでくらしてゐる漁夫なのです  
けつして、あんなことをして

あそんでゐるのではありません

冬

河原の水は浅いけれど  
みにしみるほど  
そんなに純く澄んでゐた  
小さな雑魚がたのしさうにすいすいと  
頭を列べておよいでゐた  
それこそピンほどのいきものだが  
それでもめがあり、くちがあり  
かわいい尾鱗さへも  
ちやんとつけてゐるではないか  
それがはつきりとみられた

冬は深い

そこら一ぱいころがつてゐる  
石塊いしころと石ころとのあひだを  
ちよろちよろとすべるほそ織い水よ  
うつとりと目をとぢた自分は  
そこへこつそりとまひをりた一羽の鷺かなんかのやうに  
枯蘆の中にたたずんで  
しみじみと  
そのせせらぎをきいてゐた  
まあ、どこからだらう  
まるで自分のいのちのふるさと  
遠いとほいところのおくのそのおくからでも  
それが、ながれだしてくるやうに

2

— 未発表・未完成作品

おもはれたのも無理はあるまい

50

友よ……

友よ

自分はなんと言はう

自分はただ何となくしみじみともえてゐるのを感じる

此の大雪のあした

此の銀細工のやうな小さい都會

それが青空にうつつてでもゐるやうな此の静かさ

その中に自分はある

### 或る日曜日の詩

けふは何といふ日であらう

此の善い日曜日は

空はくもつてゐるけれど

自分達はうれしさに跳ね起きて

そして朝の聖餐を

高德なやさしい老宣教師からうけるために

町の寂しい教會をさしていそいだ

おお此の身を切るやうな冬の朝

老宣教師の異人さんの物悲しい火のやうな祈禱

キリストの肉と血

此のパンと葡萄酒

これをたべ

これをのみ

而して生きよ

土の中なるみみずのやうに

おおいまは全くみみずのやうだけれども

かくも天のめぐみに充ち溢れた自分だ

妻よ

きつとお前も此の貧しさを

大きな愛のしるしである此の人間のくるしみを

よく感謝してきたらう

更に此等のくるしみが喜んで忍べるやう

よくおいのりしてきたらう

こども等よ

お前達はいつもみつかひのやうであれ

空はいよいよ險悪になり

ぼつぼつ雨さへ落ちてきた

けれども妻よ

ひさしぶりで敬虔なお説教をきき

ひとびとと一しよに讚美歌をうたひ

どんなに清<sup>すが</sup>清しい氣持であるか

それから小さい墓口から

生命<sup>いのち</sup>のやうな銅貨を二三枚

それが自分達の全財産だつた

それをつまみだして

みんなそれを

こつそり信施囊に投げこんだお前  
そして今

教會の門をでるところだつた  
そこへ自分が雨傘と足駄をかかへて驅けつけたのを見て  
につこりしてくれたお前

おお健氣な妻よ

自分は泣いてなんかるやしない  
これは雨のしづくだ

いのちのみちを……

いのちのみちをここまで

俺は踏みつけてきた

俺と一しよに

妻や子ども俺のあとからふみつけてきた

おお神よ

凡てが正しい

とは俺達にしてほんとの言葉だ

俺達をとりまく

此の怖しいくらがり

此のひどいぬかるみ

繊弱い妻はあかんぼを背負ひ

子どもは血のだからだとながれる足を引摺つてゐるのだ

みよ、俺達の上に

またしても俺達をめぐけて

おお此の莊嚴さは

野獸のやうにのしかかるあらい

いのちのみちをここまで

俺はふみつけてきた

俺と一しよに

妻や子どもも俺のあとからふみつけてきた

俺達のうしろで

うようよと蛆蟲のやうに相集まり

俺達を罵るこゑごゑ

それがなんだ

そんなことで振り向けられるやうな此の首ではない

くるしみよ

一ど踏みつけてきた道を

どんなことがあらうと

くたばつても

二どとふまないつむじ曲りの俺

その俺の妻や子どもだ

それがどんなに美しくも

またそれがどんなに

大きな平和と幸福にみちた世界であらうとも

過ぎさつたものが何になるのだ  
なんでもない  
なんでもない

俺は前方をにらんでゐるのだ  
どんなものでも来い

なんでもこい  
渦巻くあらし

おお人間の生きのくるしみ  
前方からくるものばかりが力だ  
打て！

それは俺達を強める  
そればかりが愛で俺達を一ツ塊りにするのだ

いのちのみちをここまで

俺はふみつけてきた

俺と一しよに

妻や子ども俺のあとからふみつけてきた

おお人間の生きのくるしみ

絶間なくかぎりなきくるしみ

その中で

俺の手は空ッぽだ

手にあるものはながくも伸びた爪ばつかり  
だが俺はびくともしない

俺には鐵のやうな意志があるのだ



それから、みよ  
それで前方を睨んでゐる  
太陽のやうな二つの眼球と

眼でみたのでは……

眼でみたのでは  
なんでもない  
手で觸つても  
なんでもない  
だがこの蜘蛛の巣はどうだ  
顔一めんの……  
おお蒼空よ

わたしはどうすればよいのか

わたしの涅槃に就て

ごろりと横に  
そしてあふむけになると  
いままできもつかなかつた桔梗色の  
ちよつと指さきで  
さわつてみたいやうな空が眼にはいる  
まる裸體はだかのわたしをめぐらして ちらがって  
くるわ くるわ  
何といふうるさい蠅だらう  
じいつと空をみてゐると

とろとろとろけさうになる

天心で蟬がないてる

わたしはもうびんぼうもなんにもわすれてしまつて  
ぐつすりと睡る

秋ぐちは……

秋ぐちは

とかく荒ッほい海

ついでこないだも

小餓鬼一びきひんのんだ

そして

三日三ばんといふもの

知らない顔をしてゐたつけが

あんまりその餓鬼の親めが

おいおいと吼え立てるので

とうとう濱の砂ッほへ

吐きだしてかへした

なぎさで網を引いてゐる

なぎさで網を引いてゐる

みる、のんきさうにひいてゐるな

をとこたちがひいてゐる

をんなたちもひいてゐる

こどもらもそれにまぢつて

みんなでひいてゐる  
網はみえない

おい、網を引いてゐるのかえ  
海を

つなで

ひつばつてゐるやうにみえるな  
のんきさうに、おい

蒼空あそぞらのやうな海を  
ひつばつてゐるやうにみえるな

ぶうう……

ぶうう

ぶう

ぶう

ぶう

るねえの

む

ぶやあ

ぶや

ぶや

ぶや

そこらにゐたつけな

どこにもゐねえだ

ぶああ

ぶあ

ぶあ

ぶあ

媪さんは豚の仔がみつからないので  
もう泣きだしさうだ

赤銅あかつねのやうな秋の日のことは  
すべて眞實をこめ  
すべてゆめで  
そしてすべてうつくしい

### 冬の着物

日一日と

二百十日の近づくやうな

ある氣味悪さ

だがその厄日が

すぎさると、すぐ

黄金色した穀物のとりいれ

そんな氣持だ

自分はその中にあつて

自分達の米や味噌となる

おとぎばなしの原稿をかき

妻は妻で

そのお腹の子のために

やがてうまれるその子のために

冬の着物をぬつてゐる

ふくふくとした  
温かさうな  
赤い、小さい……

### 身自らにおくるの詩

くるしみぬいたとうぬぼれてはならない  
くるしみきれぬと絶望してはならない  
断えず苦しめ  
そしてほほゑめ  
くるしみは浪のやうなものではないのか  
磯岩をかむその浪浪  
うみ草を洗ふ浪浪

うかぶ船  
むれとぶかもめ  
浪浪のうねりをみないか  
生きたその美しさを見ないか  
くるしみの上にあれ

3

— 大正六年頃

わたしは祈る

釣竿は細くさみしく  
哲學的な冬の日を、  
わたしの釣によつてくるのは  
頭の大きい鯊ばかり  
いくらじれても  
決して釣られぬものがある。さんたまりや

雪

冬は深くなつた

北國から來る汽車はどの汽車もどの汽車も  
みな雪を屋根にのせて來る

その雪のま白さよ

まだ見ぬ山の雪であらう

山の麓をとほる時のせてもらつた雪であらう

なにかもこれからだ

窓々からながれ込む冷つこい新鮮な空氣  
はつきりした意識で見上げる空  
ぎつしりつまつた街の家々  
屋根も木もまつ黒だが大きな煙筒と一しよに  
すばらしい立派なものを自分に與へる



元氣のいい朝の挨拶をたがひに交してゐる工場の汽笛はどう  
だ

過ぎ去つたことがどうなるものか  
なにもかもこれからだ  
なにもかもこれからだ

### 先驅者

うす暗い街裏の  
竹籥の中から  
とつぜん笛がなりだした  
笛は唳唳と  
何か思ひだしでもしたやうな月が

わたしの着物に光澤をつけた  
横町のばかにふかれて  
ああい  
ああその笛は  
昨日こしらへてゐたあれだ

### パン

わたしのパンには  
遠山の雪のにほひがある  
五月ごろの空の匂ひがある  
この大きな青空では  
雲雀がちうちうさえづつてゐる



それからまた  
うすらねむいこの目の附近に  
ひろびろとした麥の畠をみせてくれるのもバンド  
ときどきはいぢわるく  
この咽喉のどの上につかへて  
ひもじい私をくるしめることもないではないが  
何といふても  
わたしの幸福はパンにある

### 山の麓をゆく汽車

のろのろと汽車がゆく  
ここは山のふもと

あたり一めんのなのはな  
まへうしろでさえづるひばり  
そのなかをのろのろと  
汽車はゆく  
その汽車のあとからついて行くわたしの幻想よ  
鱒は泥田にみをかくした  
それを捕らうとしてゐた子どもは腹を立て  
小石をひろひ  
汽車をめがけて投げつけた  
それをみてだるさうな  
汽車は汽笛をふき鳴らした  
この汽車はどこへゆくのか知れたものか  
なんといふながいれえだ

## 掟

ながらくやすんでゐたおぢいさんはもう目がみえず  
大空の方へその手をさしのべて  
もいちど太陽を拜みたいと言つたが  
それができなかつた  
そしてまつくろにすすけた古い大時計のしたで  
此の家代々の掟として  
おぢいさんはいま旅立つと  
うまさうに臨終の水をのみ干した

## 帽子をとれ

そのふるほけた帽子をとれ  
此處は都會の大十字街  
堂々たる此の大銀行をみる  
なんにもしらないるなかびとですら  
この大銀行の正面ではあたまを垂れる  
ああ玩具のやうな大都市  
けむり吐く大煙筒の林よ  
此のすばらしさに帽子をとれ  
そんな帽子は投げすてろ  
ここはひとびとをひきよせて

そのひとびとを飢えさせるところだ

### 何もかも眞實である

此の穀物島の上をはしる電線  
二すぢ三すぢ

電線はほそくながく

そしてはてもなく

ほそほそと刹那刹那に

遠い世界のはてを感じてゐる

刈り干された麥々

ひろびろとした穀物島

風はその畝畝のあひだで息を殺してゐるのか

ひろびろとしかもさみしく

ああ電線の敏感

ああ穀物の熟れゆく匂ひよ

何もかも眞實である

ああどんなことでもそれがわたしを力づける

わたしを大きくやさしくする

### 悲壯な風景

みる

大暴風の驟ちらした世界を

此のさつぱりした<sup>むじたら</sup>惨酷しさを

骸骨のやうになつた木のでつぺんにとまつて

きりきり百舌鳥がさけんでゐる

けろりとした小春日和

けろりとはれた此の青空よ

此のひろびろとした青空をあふいで恥ぢろ

大暴風が汝等のあたまの上を過ぐる時

汝等は何をしてゐた

その大暴風が汝等に呼びさまさうとしたのは何か

汝等はしらない

汝等の中にふかく睡つてゐるものを

そして汝等はおそれおののき両手で耳をおさへてゐた

なんといふみぐるしさだ

人間であることをわすれてあつたか

人間であることを恥ぢよと

けろりとはれ

あたらしく痛々しいほどさつぱりとした青空

その下で汝等はおもうあらしも何も打ちわすれて

ごろごろと地上に落ちて轉つてゐる果實

泥だらけの青い果實を拾つてゐる

おお青空！

あかんぼの目のやうな此の空！

## 蛙の詩

お杉山から日がでた

まんまるい大きなその日

その影がたんぼに浮くと

—大正八・九年頃

蛙が一びき

たつた一びきはづかしさうに  
どこかでころころと鳴きだした  
するとみんなつづいて  
やかましくなきだした

## 自分の詩

—房州にて—

飯がすむと

すぐ食卓は机になる

ぐづぐづ茶碗をつついてゐる子どもらはせきたてられて

食卓は机にかはる

めしつぶだらけのそのうへには

あたらしい原稿紙が延べられ

その上をペンがはしる

時には

どうしてもペンのうごかぬこともある

かうして自分の詩はかかれるのだ

また或る時には

詩がかきあげられぬので

なかなか机は食卓とならず

家族が酷くお腹をすかすことさへある

かうして自分の詩はかかれるのだ

けれどみよ

今日といふ今日はその上に

善い友からの薔薇がうつくしく飾られてゐる

かうして自分の詩はかかれるのだ

おお此の深いいのちをこめて

ひとびとの手にかほり

しみじみとよまれる 拙い詩

いのちのあるもの

いのちのあるもの

その嚴肅なうつくしさが自分を打つのだ

ここに小さな家がある

自分達の此の家をめぐつて

矮いいぢけた四五本の木木がある

それでも夏が近づいたので

それぞれに葉つばをつけた

葉つばをつけた木木のかげでは

そのははと

豚の子のやうにかわいひ自分達の子どもらが

ぎあぎあないたりわらつたり

それにとれて

餌を拾ふのをわすれた雀が

となりの屋根にしよんぼりと

おお寂しさうに一羽

いのちあるもの

その嚴肅なうつくしさが自分を打つのだ

そのとき

ちらと自分の耳をかすめた言葉

垣根の外ではつたりであつたよほよほのとしよりの

これは涎のやうな立話しのその別れの言葉だ

「一日も餘計に生きさつせえよ」

ある日の詩

ひさしぶりで肉を買ひました  
牛肉です

その鍋が火鉢の上にかかつてゐるので

肉と野菜のこんがらがった

いい匂ひがぶんぶんと

部屋一ぱいです

部屋からあふれてゐるのです

みんなでかけたあとにぼつねんと

自分は留守番をしながら

ひとりさびしくその肉を煮てゐるのです

そしてかんがへてゐるのです  
あるひとつのことを

鍋の中では

肉がさかんにをどつてゐます

やがて自分のかんがへはふらふらと揺れだし

唐草模様の蔓のやうな手を伸ばし

蜘蛛が巣をかけるやうに

つつとすばやく

たちまち憂鬱な雨ぐものやうに空一めんにひろがりました

自分はもうどうすることもできないで

ぼんやりといまはただそれをながめてゐるばかりです

鍋の中では

肉がさかんにをどつてゐます



## 黎明の詩

まだうすぐらい街道を  
すたすたといそいだものがある  
ほんのりと  
窓があかるく  
からすがなき  
すずめがさえづり  
荷馬車がとほり  
電気がきえ  
そして朝となつた  
わたしはかうして寢床の中にあるが

## 夕の詩

どんなことでもきいてゐる  
どんなことでもしつてゐる  
やがて太陽は畠の上にてくるのだ  
しみじみと黄金色した穀物畠でもみようとおもつて  
とつぷりとひがくれてから  
しばらくたつた  
うすぐらいともしびの下で  
一家團欒の夕餉もすみ  
そしてしんみりとしづかになつた  
これから世界の休息だ

人間もその仕事をまつたくやめ  
みんな寢床にもぐりこみ  
のびのびと足を伸ばして  
そこで

今日一日のことをかんがへ  
明日の計畫をしながら  
すやすやとねむりにつくのだ  
ようくおやすみ  
ようくおやすみ  
ぐつぐつと  
からすのなくまで  
すずめのなくまで  
世界一ばい朝ののぞみに溢れよと

あたらしい太陽の出るまで

### 椿

竹やぶの椿は火のやうに眞赤だ  
神よ

自分はなんと祈らう  
この烈風の中で  
この烈風の中で

### 窓にて

うらの窓から見ると

すぐ窓下の庭にあるひねくれ曲つた一本の木  
すつかり葉つばの落ちつくした  
それは大きないちぢくの木だ  
そこに楨の生垣がある  
その外は一めんの野菜畠で  
葉つばや大根が葱もいつしよに青々としてゐる  
その上をわたつてくる松風や浪の音  
朝々のきつぱりした汽船の汽笛  
みよ雪のやうなけさの大霜を  
河向ふの篠やぶでは  
鶉がひきさかれるやうな聲をして鳴いてゐる  
ふたたび裏庭のいちぢくの木をみると  
いままで自分はきづかなかつたが

もうその枝々には  
どの枝々のさきにも  
みんなおなじやうに新芽の角がいろづいてゐる  
此の氷のやうな世界につきだした槍の穂先  
あのあらしの中から伸びでて  
何といふ強さであらう  
此の健康をみる  
此の生の力を  
いまこそ自分は自分を信ずる

## 春

ほんのりとかすみをこめて

もうそのなかで  
はやい燕をさえづらせてゐる空  
麥畠の畝畝をこえ  
とほくの村から  
こどもらの麥笛をさそひ  
大工がひやうしをとつて棟木を打つ  
重々しいどんよりとした大槌の音がきこえる  
なんといふのどかさだらう  
またにんげんの  
あたらしい巢ができるか  
にんげんはその巢で  
妻を娶り  
こをうみ

こをそだて  
父母をここから  
墓場へと葬りだすのだ  
おおはるよ  
どんな草木もあをあと  
めをふきはなをさかせてゐるのに  
自分はかなしい  
野獸のやうにおそれず強く生きようとする自分だ  
而もなんとなく………

### 萬物節

なんでもかでも

いのちのあるものは

一つ残らずでろ

此のしつとりとぬれた地べたの上にててこい

ああい季節だ

みんなでろ

そして太陽の下にあつまれ

卵をわつて中から雛ひなつ子がとびだすやうに

みんな飛びだせ

### 太陽の詩

薔薇色の黎明

ほのぼのと

どこかで雀が鳴いてゐる

寂しさうに鳴いてゐる

而も何となく

力強く

朝

大青海原に躍りだした

おお太陽

あかんぼのやうに

闇の中から生れてたのだ

きらきらとかがやき

磯近く

その太陽をまつてゐた漁夫達

うれしさに合掌し

うみはいま

なみもしづかだ

新しい日がきた

草木はしげり

とりもけものも人間も

生きんがために

働くか

各自の仕事を

みよ

太陽はのぼつて行く

中天をめがけて

そして地上の萬物はうつくしく

かなしく

おごそかであれ

### 蜀黍畑がある

蜀黍畑がある

ここにもある

かしこにもある

丘の上にある

谿間にある

海岸にある

あたらしい開墾地にある  
どこにでもある

蜀黍畑がある

もう穂になつたもろこしは頻りに耳を澄ましてゐる  
何をきいたか

草木をわたる秋風と

渡鳥の翼の音と

くだける波と

がた馬車のラツバと

それに私の溜息

……其他

蜀黍畑がある

そして、もろこしはみんな穂首を低く垂れてゐる  
その穂首からは

黄金色の大粒な日光のしづく

ほたりほたりと

地に滴つてゐる

ほたりほたりと……

策には米が一ばいある

策には米が一ばいある

さつき穀商こくひやうがもつてきたんだ

それが縁先で

その箒の中でひかつてゐる

靈魂たましひもよろこべ

よし四五日で

これはなくなるにしても

とにかく箒には米があるのだ

妻は松ばやしの泉まで洗濯に行つた

そして自分は眠つてゐるあかんぼの蠅を追ひながら

出埃及しゆつえい記をよんでゐるのだ

そこへ遠くできく海のやうな

おお此の寂しい人間の額ひたひにしみじみと

うちよせる

うちよせる

漣さざなみのやうな松風よ

### 日光の詩

おお此のしみじみとした貧しさ

此のしみじみとした貧しさに

何といふ日光であらう

此の美しさは

そして妻は自分を愛して

自分は妻を愛してゐる

相愛してゐるのか

ふたりは野獸のやうに生きてゐるのだ

ふたりの間にはあかんぼと



も一人の子どもがある  
辛つと一つの巢がみつかつて  
はなればなれになつてゐた  
親子が一しよになり  
此のしみじみとした静かな生活を始めたのだ  
ここは海近い  
松林のほとりだ  
おお破れた障子の孔々から  
なんといふ美しい日光であらう

## 朝

朝露の

ささげ畑をとほつたら  
ささげが低聲いた  
「どこにおちても俺等は生へる  
はなもさかせる  
みもむすぶ  
そしてまあ  
何てきれいな世界だろ」

## この鴉を見る

とつぷりと日はくれて  
しづまりかへつた此の天空  
何處からともなく

あつまつてきた鴉の群

があがあなきながら

圓を描き

ぐるぐるとみだれめぐる

この鴉をみる

人は人としてつかれた足をひねもすひきずり

そのゆくすゑさへも知らないのだ

それでも落窪んだその目に

お前達のすがたがうつると

それだけでもすぐに何かを考へるのだ

ああ大空の鴉ら

空もまつ黒にみえるほどいつしよになつて

ぐるぐるめぐりながら

があがあなく

これが夕の挨拶であるか

かうしてお前達はけふ一日のことをたがひにかたらひ

また明日のために祝福しあつて

各自のねぐらに歸るのか

何といふ立派なことだ

お前達の巢にもかわいひ雛が待つてゐるであらう

はやくおかへり

ああ何といふ立派なことだ

## 大光明頌榮

ひかりよ

ひかりよ  
いまこそ萬物の季節である

ひかりよ

ひかりよ

よびいだせ

夜より

朝を

朝より

いのちを

ちからを

そして望みを

よびいだせ

あらゆるものを

土の中なる

みどりの芽を

芽よりは

花を

花よりは<sup>いけり</sup>芬香を、また  
枝々もたわむばかりの善き<sup>このみ</sup>果實を

森また谿間よりは

小鳥を

小鳥よりは

ほがらかなる聲の唄を

海底よりは

魚の群を

光よ

光よ

よびいだせ

さらに、また

その悲しみと苦しきとよりは

ひとびとを

そのひとびとの蒼ざめたる<sup>たましひ</sup>靈魂を

よびいだせ

この蒼穹<sup>あそぞら</sup>のしたに

この美しき地上に

おう、いのちある

ありとあらゆるすべてのものよ

太陽のもとにあつまれ、と

雄渾なる山嶺

山、それは力だ

此の秀麗なうつくしい山

山はうつくし

けれど寂しい

山は静穩だ

山は孤獨だ

山はさびしい

さびしいが

ちつとみつめてみると

若々しく

單純で

そして眞實で美しい

山

静かな山

雲表にそびえた山

冷酷で

眞實で

雄大で

平凡である山

大地にふかぶかと

ぐつと足をふんばつたやうに

そして蒼空に

その額をすりつけてゐる山

きよらかなめで山に對へ

山は神聖である

また山は力強く

どつしりした力強さで

その大きな手で

やさしくだきしめてくれる

山は語らないが

その深いところには

火のやうなおそろしい情熱がある

ああ山

山

山

平凡で

幽邃で

崇高な山

みよ、その瀨瀨のあたりの赤禿げ

そこに夕日がかつとあつて

あかあかと壯嚴に反射してゐることもあるが

とほく

とほく

だがそれは暮近くのことだ

黎明の山は、まるで

みがきあげたやうな清淨さで

棚曳いてゐる朝霞の上に

くつきりとうつくしく立つてゐるのだ

ほんとに秀麗な山だ

それでゐて

また馬鹿々々しいほどの巨大さである此の山

手をのばせば

この指尖が

天にとどくやうなそのてつぺんに

いま自分は立つてゐる

ここでは

草一本生えてゐないのが

なんともいへず寂しい

さびしいのか

あまりに崇高すぎるのである

自分のこの小ささ

みるかげもなく……

みすぼらしく……

ここからみると

どこもかしこも一面の靄で

靄のほかにはなんにもみえない

星が天一ばい

こぼれるばかりにきらきらしてゐる

それだけだ

やがて遠く

その靄の中からほんやりした大きな金貨のやうな太陽があた

まをだすと

あたりがだんだんはつきりして

空は空

山は山

あんなにでてゐた星も

いつのまにか

一つのこらずなくなつてゐる

靄がうすらぎきえてなくなると

山山が鮮かにみえる

山山はちやうど浪のやうだ

その山と山とのあひだに

白くひかつて

ながながと

帯のやうな河がみえる

一めんの平地である

青々とした丘がみえる

ずつと遠くには海がみえる

小さくかすかにそれがみえる

けれども村々はみえない

都會もみえない

とにかくそのどこにかたくさんのにんげんもすんでゐるのだ  
が

それがひとりもみえない

そればかりか

ここには鳥も啼いてゐない

草一本はえてゐないから

花もない



獣もゐない

ここはそんなに高い山のでつぺんだ

麓をみればただふかぶかと樹木がはえしげり

そのうへにたかくたかく

によつきりと立つてゐるのが此の山だ

太陽ののぼるにつれて

それとなくいつしかおちついてきた自分

もうなんでもない

雲があしもとをかすめてゆく

雲は息のやうだ

風を起してゆく

その雲も

小さいのはいいが

大きなのになるとすこし怖い

ぼろりと自分獨りがさみしくなる

なんともいへずさみしくなる

けれど

それが過ぎさると

また、なんでもない

さすがに高山はさすががしい

そのてつぺんにたつてゐると

自分は

きよらかに洗ひ晒されたやうだ

そして自ら神々しくさえなる

ああ此の自分が

麓にあつてはまるで獣のやうであつた自分が

(なんとといふ恥しいことだらう)

それがどうだ

いまは

此のなごやかさは

此の静穩しづかな

此の深い

此のひろびろした海のやうな心で

此の手を

すべての上に伸ばしてゐる

これが自分であらうか

否

神である

自分はいましも神である

自分はそして山のでつぺんに立つてゐるのだ

ふもとのことをおもへば

そこには

森があり

野があり

畑や田圃があり

沼があり

海があり

そして鳥や獣やむしけら

もろもろの魚類

草木

穀物

また村々があり

都會があり

そこでたくさんのひとびとは

よろこんだり

かなしんだり

生れたり

死んだり

それにひきかへて

ここではすべてが永遠である

ここには生も死もない

よろこびもない

かなしみもない

なんにもない

ただ永遠があるばかりだ

雨がさつとかかる

この雨は下からふる

上へふる

風もふきあげる

山裾はとほく驟雨のやうだ

雷も

谿底の方でごろごろしてゐる

だがここはからりと晴れわたつてゐる。そして

太陽はすぐ頭の上だ

おお山は

山は千古の眞理である

山は宇宙の意志である

山は自然の感情である

山は音楽である

この幽邃

この壮大

この嚴肅

この沈黙

この憂鬱

この豊饒

この淳朴

この眞實

この一徹

この寛容

この愛

この情熱

この冷酷

この孤獨

この靜穩

この無爲

この閑寂

この深遠

この晴朗

この美以上の美

この力以上の力  
この神祕なあらはれ  
この幻想的な雄大  
この單純なる  
この平凡なる  
この秀麗なる  
この崇高なる  
この清淨無垢なる

そのともは  
星であり  
月であり  
太陽であり

風であり  
雲であり  
また雨であり  
雪である

山はとこしへにめざめず  
ぐつすとねむつてゐるともみえ  
または、じいつと高いそこから  
下界をながめてゐるともおもへる  
なんにせよ  
山はこの世界を飾る  
山は  
この世界に巨人をうみだす

山と山とのたにまから  
湧いてながれてつきない泉よ  
ちよろちよるとながれでるその水のきよらかさ  
そのみづを手に掬むものに生長いのちながかれ

ああ山、山、山  
山はいい

ふもとでは  
蛆蟲のやうにうようよとむらがつて、いまもいまとてひとび  
とが  
まるで沸えかへつた熱湯の中のやうなくなるしみに  
あえぎあえいで生きてゐるんだ

ああ山、山  
ここにかうしてゐると自分は神だ  
だが自分はふもとをおもふ  
此の山をくだらなければならぬ  
山の靈氣をみにおびて  
此の山をくだるのだ  
自分も  
ひとびとと一しよであるために  
ひとびとと一しよになるために  
そのくるしみの  
その渦巻をめがけて  
そのひとびとの中に飛びこまなければならぬ

おお山よ、すばらしい山よ  
いまこそ

お前は自分の中にある。

## 日本

日本、うつくしい國だ

葦の葉つばの

朝露がぼたりと

おちてこぼれてひとしづく

それが

此の國となつたのだとでも言ひたいやうな日本  
大海のうへに浮いてゐる

かあいらしい日本

うつくしい日本

小さな國だ

小さいけれど

その強さは

鋼鐵のやうな精神である

おう日本

びちびちしてゐる魚のやうな國

勇敢な日本

古い日本

その霧深い中にとちこもつて

山鳥の尾のながながしいゆめをみてゐたのも

いまはもうむかしのことだ

めをあげて

そこに

どんな世界をお前はみたか

日本、日本

お前のことをおもふと

此の胸が一ぱいになる

お前は希望にかがやいてゐる

お前は力にみちみちてゐる

そして真剣だ

だが日本よ

お前の道はこれまでのやうに

もうあんな平坦なものではあるまい

お前はよるひる絶えず

お前のまはりに打寄せてゐる

その波の音をなんときいてゐるか

寂しくないか

おう孤獨な

遠い一つの星のやうな日本

からりとはれた黎明の<sup>そら</sup>天空のやうな國

ときどきは通り雲の

さつとかかるぐらゐることはあつても

おまへはまだただのいちどでも

その顔面に泥をぬられたことがないんだ

そんな美しい國なんだ

日本

幸福な日本



強い日本

わたしらは此處で生れたんだ

また此處で最後の息もひきとつて

遠祖らと一しよになるんだ

墳墓の地だ

静かな國、日本

小さな國、日本

つよくあれ

すこやかであれ

奢るな

日本よ、眞實であれ

馬鹿にされるな

### 陸橋の上にて

あけがたの

此處は大都會の入り口

初冬のステーション

わたしは陸橋の上から遠く北國の山山をおもつてゐる

そこへ汽笛をながながと鳴らして

足をひきずる旅人のやうに

やうやくたどりついた急行列車

それを迎へにプラットホームへはしりてた

老驛長の顔をみる

おお歸つてきたか

おお  
そして道中無事であつたか  
汽車はなんにも答へない

日あたりに………

日あたりにひきずりだした蒲團は  
それこそぼろで、板のやうであつたが  
すぐぶくぶくと  
生きかへつたやうにふくれあがつた  
ああ、天気は有難い  
こんなによく晴れては  
どんなに今夜は凍るだらう

だがこの布團ふとんのなかでぬくぬくと土龍もぐらのやうに  
子どもらをまんやかに  
妻も自分もかぢりついて寝るんだ  
これもまた  
冬の一つのよろこびである  
自分達貧乏人でなくては、とても  
うけられない天の祝福である

### 一枚の櫛

子どもらと茶黄ちやう採りにゆき  
海岸のかけつべの  
ばらやぶの中で

一枚の櫛をひろつた  
二十前後のをんなのものだ  
葉<sup>ぐみ</sup>莫は一粒もなかつた  
それにしても  
どうしてあんなところに櫛は落されたのだらう  
それがなんとしても  
不思議でならない  
だから、いつまでたつても  
かうしてわすれられずにゐるのだ

### 雑草

ひにち

まいにち

水をやってゐたのが  
こんな雑草であつたか  
こんな雑草だけれども  
ひにち  
まいにち  
水をやってゐたのだ  
可愛くなくてどうしよう

### 冬

冬がきた  
つめたくなつた

けさの初霜で

子どもたちの頬つぺたが

ほんのりあかく

林檎のやうにまるく

食べたいやうになつた

冬がきた

つめたくなつた

## 蚊

自分は自分をみた

はじめてしみじみとみた

自分はおそろしい蚊の群集で

血に飢ゑ

うめきくるつてゐた

吊られた藪の中にごろりと

痩せこけてよこたはつてゐたのは

そしてその蚊の群集をながめてゐたのは

いふまでもなく

詩人山村暮鳥氏であつた

## 青い天

庭さきに立つてゐる

一本のながい竹竿

すつかり秋です  
ね  
そのてつべんの赤とんぼ  
それがとびさると  
そのあとには  
青い、あをい、大きな天……

「私信より」

## 風景

——加藤一夫氏におくる——

畑の陸稻を、もろこしを  
さやから飛びだす豆粒を  
でてみる、でてみる

木のとつべんの  
鴉めがまひ下りた  
それ追へ、百姓

でてみる、でてみる  
馬鹿に大きなお日様が落ちさつしやるので  
世界はきんいろ  
おれもきんいろ  
すばらしい景色だ  
でてみる、でてみる  
すばらしい景色だ

だが、まつたく  
景色ぢや腹はふさがらない

### 大風の詩

けふもけふとて  
大風は朝からふいた  
大風はわたしをふいた  
その大風と一しよに  
わたしはひねもす  
畑で大根をぬいてゐた

### 眞言

(眠れる白醜君に)

秋の日の  
しろがね  
おん足  
病めるは草木

蟋蟀  
空をしみじみ  
眞實一念  
練金す

芽

をかのはたけの  
むぎのめ  
にさんずん  
ぶりずむのふゆがきて  
そのめのうへに  
ふりつものるゆき  
ゆきにつみはなけれど……

かなしさに

いつぼん銀の神経  
それを鼻のとんがりに立て  
かなしさに  
かなしさに  
そのうへで  
けふもけふとてくるくる廻す  
麗かな冬の日の青空  
こどもは死んでしまった

## 編纂後記

山村暮鳥の遺稿（詩・童謡・童話）を携へて、山村未亡人が上京されたのは十月末のことであつた。花岡謙二君と同道して厚生閣を訪ねられた。暮鳥の生前に水戸で一度か二度お目にかゝつたことがあるが、その頃にくらべるとすつと肥つてゐられるやうにお見受けした。

遺稿は詩・童謡・童話のほか、小説、感想、翻譯なども相當の量に上つてゐるさうであるが、こんどはとりあへず詩だけを拜見することにした。この詩集に収録したものゝほかに、『三人の處女』以前の作品、『三人の處女』と『聖三稜玻璃』の中間の作品などもあつたが、感ずるところもあり、とりあへず『風は草木にささやいた』の前から大正八九年頃



までのものを、未発表・未完成の作品を中心としてとりいそぎ一冊にまとめることにした。いま大體判明してゐるものだけの製作年度を、その後夫人から届いた手紙によつて次に挙げて置く。

1 (未発表と思はれる作品) の扉詩(扉の裏に九ポイントで組んだ詩)を除いて「陸稲島を……」までが大正六年、「喫茶の詩」七年、「自分はこれまで……」から「ある農夫に就て」までが八年、「うす濁つたけむり……」からは十二年の作品で、そのうち「りんごよ……」だけが十三年になつてから書いたもの。

2 (未発表・未完成の作品) では、最初の「友よ……」から「なぎさで網を引いてゐる」までが八年、「或る日曜日の詩」だけが七年、それから「ぶろう……」が九年、「冬の着物」が十年、「身自らにおくるの詩」十一年。

3 の作品は大正六年一月から九月まで、雑誌「詩歌」(前田夕暮氏主宰)に載せたもの。

4 のうちで判明してゐるものは「自分の詩」、「いのちのあるもの」、「ある日の詩」、「黎明の詩」、「夕の詩」、「椿」、「窓にて」、「春」、「萬物節」、「太陽の詩」、「蜀黍畑がある」、「笹には米が一ぱいある」、「日光の詩」、「朝」、「大風の詩」が七年から八年にかけてのもの。「この鴉を見ろ」は六年、「日本」九年、「青い天」十一年、「雄渾なる山嶺」、「陸橋の上にて」十年、「大光明頌榮」「蚊」十二年、それから最後の「眞言」「芽」「かなしさに」の三篇が五年の作、他は不明である。

題のついてゐない作品(主として未完成のもの)は、最初の一行の始めの數語にリ・ダーを付けて題に換へておいた。

既刊の詩集に入れられた詩は省いたが、或は二三重複してゐるものが

あるかも知れない。

本の題の「萬物節」は集中の一篇の詩の題から私が選んだ。装釘も嘗て椎の木社時代に幾冊かの詩書を手がけたことを思ひ出し、昔に返つたつもりで自分でやつて見たが、いろ／＼材料を制限されてゐるので、思つたやうなものにはならなかつた。たゞ室生犀星君が早急の乞を容れて題簽を引受けてくれたことは有難かつた。古い友だちのかういふ厚意を、故人も地下で歡んでゐてくれよう。

もしこの詩集が迎へられたら、つゞいて未發表の初期詩集その他の刊行にも順次及んで行きたいと思つてゐる。以上事務的なことだけを書きつけた。(百田宗治)

昭和十五年十二月八日印刷  
昭和十五年十二月十一日發行

萬物節

定價一圓八十錢

著者 山村暮鳥

發行者 岡本正一

印刷者 鈴木芳太郎

印刷所 玄眞社印刷所

東京市麹町區六番町六番地

發兌 圖書 厚生閣

電話九段三二二八番  
振替東京五九六〇番

記紀歌謠新解	相磯 貞三著	價六・八〇千二二
校本八雲御抄とその研究	久曾神 昇著	價六・八〇千二二
良寛百考	相馬 御風著	價四・二〇千二二
現代日本語の表現と語法	<small>九大教授 文學博士</small> 佐久間 鼎著	價三・九〇千二二
現代日本語法の研究	<small>九大教授 文學博士</small> 佐久間 鼎著	價五・〇〇千二二
現代文章の日本的性格	金原 省吾著	價三・二〇千二二
主知的文學論	阿部 知二著	價一・五〇千一四
私の小説研究	伊藤 整著	價一・四〇千一四
わが小説修業	文壇五十三家執筆	價一・五〇千一四
短篇四十八集	月刊文章編輯部編	價一・九〇千一四

910
249

終

